

2021.07.20.

T.Kobayashi

大相撲観戦ひとりごと
久しぶりの名古屋場所

「白鵬が進退を賭ける」、「照ノ富士が横綱を目指す」、「高安は大関に戻れるか」などなど騒々しい騒ぎ立てで場所が始まった。それよりも、私なりの心配事は、久しぶりの地方場所で今度は誰が不祥事を起こすだろうかということだった。

いざ始まってみると、そのような心配はさておき「やはり観客がいる方がテレビ画面で見ていると迫力がある」という印象の方が勝り、いつの間にか15日が流れてしまった。

この場所で気がついたことを、いつものように雑書きしてみる。

<1> 場所総評

大関からの陥落が内定していて休場の朝乃山、序盤で怪我をして休場の貴景勝、あてに出来ないどころかその通りの流れになった正代。大関としての存在を示したのは大関に復帰した照ノ富士だけという状況で、序盤から白鵬と照ノ富士に絞られた状態の、(結果の予想がつくような)あまり面白味のない展開となった。

とは言え、日を追ってこの二力士だけが残る状態になり、「千秋楽結びの一番に全勝で対決」という久しぶりに見る面白さはあった。

最上位の二力士が無敗であることから、殊勲の星をあげる若手力士の登場もなく、これをもって「つまらない場所」と評する人いるようである。

<2> 目に止まった力士たち

白鵬 序盤の相撲ぶりでは、「千秋楽まで持つだろうか?」と感じさせる場面が散見し、ことによるとこれが最後の場所になるのかも知れないと感じた。しかし中盤から徐々に動きが良くなり始めて、終盤には「勝つ」という意欲が感じられる場面が多くなってきた。

「体の音を聴く」ことに長けていることと、「技と手順の引き出し」の多さが45回目の優勝につながった。

勝負の観点から見るとこのような所感になるのだが、毎日行われる横綱土俵入りでは別な景色が見えた。

「せり上がり」がかなり速く、前傾しすぎて秀麗さが感じられなくなった。その昔相撲解説者の方が「せり上がりの動作は、膝と大腿部にかなりの負担がかかるので、この動作を見て場所前の仕上がり具合を診断できる」と話していたのを聞いた事がある。白鵬の膝の具合はあまり良い状態ではなくなってきているのかもしれない。

*相撲協会のトップページに載っている白鵬の土俵入り画像はこちらから <https://www.sumo.or.jp/>

照ノ富士 前後左右に適度に開いた両足の上に体を乗せて、膝と腰を曲げて前傾姿勢を保つということを中心として前進しながら手が前に出て相手のまわしを探るというスタイルが目立った。後ろに下がる取り口の持つ落とし穴を知っていて、常に前進を心がけていたのが目についた。毎日の取りロー一つ一つを丁寧にこなしていくという姿勢が感じられ、安定した四つ相撲になっていた。千秋楽に白鵬に敗れ優勝こそ逃したが、評価に値する実績を上げたと言える。「一心不乱」という言葉を感じさせる15日間だった。

玉鷲 東前頭10枚目で横綱・大関とは対戦しない地位に下がったが、11勝4敗の好成績を上げた。序盤は1敗、中盤で2敗、終盤でも1敗しかせず、安定した伸びやかな突き押し相撲が光っていた。

1984年11月生まれで、間もなく37オになる。しかも初土俵から104場所・1361日一日も休まずに土俵に上がっていて、691勝670敗という足取りである。筋肉の張り具合を見ると、かなりきちんと稽古が出来ているように感じられるので、この記録はまだまだ伸びそうな気がする。

「千秋楽に勝ったら敢闘賞」という意味不明なノミネートを受けたが、翔猿に破れて叶わなかった。

豊昇龍 西前頭5枚目まで躍進した今場所、最も光っていた力士かもしれない。腰の構え、まわしの取り方、縦横無尽に動ける相撲、突き押しあり・投げあり・寄りありの多彩さは「相撲のセンス」を感じる。何よりも、勝負に入ってから動きの機敏さと粘り強さが、見ていても楽しい。このまま成長していくと、それなりの地位に就くことも可能な予感がする力士である。10勝5敗で技能賞を手にしたが、上位陣と総当たりになる来場所が楽しみだ。

琴乃若 上位の壁に跳ね返されて西前頭11枚目まで下がった今場所は、いつの間にか12勝3敗という驚くような成績を上げて敢闘賞を受けた。体の柔らかさなどを中心に様々な評価をする人が多いが、私はあまり高い評価はしていない。腰高で、流れの中で勝機を見つけて器用に勝つというパターンが多く、勝ち星の大半が「下りながら打つ技」で攻めを感じない。立ち合いのパワーを身に付けて、相手の土俵で「攻め」の相撲を展開しないといけなと見ている。もし世間が騒ぐような逸材であるならば、この課題を克服する必要があるだろう。

霧馬山 派手さはないが、毎場所少しずつ磨きがかかって進化しているのがわかる力士である。低い体制、押っつけの形、前さばきの良さなどは師匠(元大関霧島)からの伝授に違いない。西前頭6枚目で高安に攻め勝つなど光る相撲もあり、9勝6敗をあげた。井筒部屋の伝統を受け継ぐ技能相撲で上位陣を脅かす存在として、来場所への期待感が深まった。

宇良 入幕直後に怪我をして序二段106枚目まで陥落したが、再入幕を果たして西前頭13枚目に戻ってきた。小兵で様々な技を繰り出す相撲だったが、筋肉質の立派な体になり、正攻法の相撲に生まれ変わっていた。相撲は「前進」を基本とすべしと認識し、体作りも含めて自己改革を進めてきたようで10勝5敗の成績の中に様々な成果が見えていた。

<3> 大関と横綱について

正代は大関昇進後5場所になるが、この間の成績は38勝27敗10休(勝率=0.507)。負け越しの場所が二場所あり、10勝以上したのは一度だけで、大関としての実績を上げているとは言いがたい。

貴景勝は大関在位12場所で、この間の成績は88勝49敗43休(勝率=0.489)。途中休場または全休の場所が5場所ある。

力士名	昇進前三場所の成績	昇進前六場所の成績	昇進した場所の成績
正代	32勝13敗(0.711)	59勝31敗(0.656)	3勝2敗10休
貴景勝	34勝11敗(0.756)	63勝27敗(0.700)	3勝4敗8休
朝乃山	32勝13敗(0.711)	61勝29敗(0.678)	12勝3敗
高安	34勝11敗(0.756)	62勝28敗(0.689)	9勝6敗
照ノ富士(一回目)	33勝12敗(0.733)	56勝34敗(0.622)	11勝4敗
照ノ富士(二回目)	36勝9敗(0.800)	67勝21敗2休(0.744)	12勝3敗

直前三場所の成績ばかりを重視して、瞬間最大風速で昇進させる現在の制度になってから、大関という地位の持つ重みが失せてきているように感じる。さらに二場所連続して負け越せば陥落するが、陥落直後の場所で10勝を上げれば大関に戻ることが出来るという制度にも何らかの問題があるように感じている。

この制度により、一旦手に入れた大関という地位を守ろうとする力が働き、「連続して負け越さなければ良い」という地位保全のマインドが心の中を占めるようになって、保守的な空気が支配してくる結果となっているのではないか。

歴史を辿ると、大関というのは最高位のポジションで、この地位で素晴らしい業績を残した者を神格化して綱を与えたという記述があった。大関の中から「心技体ともに優れた力士」に綱が授けられて「横綱」と呼んだ。横綱となってから「心」すなわち相撲に取り組む姿勢やその根幹となる常識感覚や人間性などの面で問題を指摘されて去った力士が何人かいる。「技」と勝ち星だけを重視した評価が先行しすぎていることに原因があると

感じている。暴力沙汰や法令遵守違反などの問題が明るみに出て地位を失う力士も後を絶たない。朝乃山や阿炎への対応の甘さが、「心」への対応の生ぬるさを表わしている。

そしてさらに近年重視されていない「体」も大事なポイントになっていると思う。神格化したポジションに置くことに絶えられる体であるかも気にしておかなければならない。

これらのことは、横綱昇進にあたって問題にするのではなく、大関昇進の時から継続的に目を向けておく必要があるのではないか。

折から、大関照ノ富士の横綱昇進が内定した。陥落・落胆から復活し一心不乱の歩みを経てこの地位を得た大関に敬意を表すと共に、大いなる期待をかけたいと思うが、「体」が持つ懸念材料ゆえにどこまで活躍できるのか気になるのが正直なところである。

新横綱誕生の場所にこのような書き方をするのはいささか気が引けるが、相撲の今後の存続・発展を願ってのものであることを付け加えておく。

そして今この最終行を書こうとした矢先、「貴源治が大麻を使用」の報道がテレビ画面に映し出された。

以上